

なぜコロナ禍の今？ 難病患者ら190人の大移動計画

会員記事

天野 彩 2020年7月26日 16時00分

独立行政法人・国立病院機構（本部・東京都）は、重い病気や障害のある患者が入院する八雲病院（北海道八雲町）の機能を札幌市と函館市に移転し、同病院を8月末で廃止とする計画を進めている。新型コロナウイルスの収束前の長距離移動は患者の命に関わるとして、家族や職員は移転延期を強く求めてきたが、計画は見直されていない。不安が解消されないまま、8月中旬の移転が迫る。



8月に患者を札幌、函館などに移送し、廃止となる八雲病院=2020年6月23日、北海道八雲町

患者の半数以上に人工呼吸器

「今移転する必要性が全く感じられない」「患者の命を危険にさらしたくない」。6月中旬、札幌市内で開かれた記者会見で、八雲病院に勤務する2人の看護師は口々に話し、移転の延期を訴えた。会見を開いた全医労北海道地方協議会の鈴木仁志書記長は、「このままではがんセンターの二の舞いになる」と、道内で集団感染が発生した病院名を挙げて危機感をあらわにした。

八雲病院は、全身の筋力が徐々に低下する難病「筋ジストロフィー」（筋ジス）、重度の身体障害と知的障害を併発する「重症心身障害」（重心）の専門医療機関。筋ジスの患者には気管切開をせず、人工呼吸による診療をする全国的にも有数の病院だ。6月30日現在、194人が入院する。患者の多くは寝たきりか車いすで生活し、半数以上が人工呼吸器を着けている。

札幌の移送先まで250キロ

機構は8月18日からの4日間で、同院の患者を約250キロ離れた北海道医療センター（札幌市）と約80キロ離れた函館病院（函館市）に移す計画を進めている。患者の高齢化による合併症の治療の強化と、見舞いにくる家族の負担軽減が移転の理由だ。

患者の移送は民間救急車や福祉車両延べ123台を使い、道外の医療関係者を含む延べ約260人が関わる。重症患者のこれほど大規模な移送は全国的にもあまり例がないという。



患者を移送するリハーサルで、車いすに乗った患者の職員を移動用車両に運び入れるスタッフたち=2020年6月24日、北海道八雲町

「感染すれば重症化」看護師も不安

コロナの影響が長引く中、職員や患者家族からは「せめてコロナが落ち着くまでは移転延期を」との声が上がるようになった。患者の移送には危険が伴うからだ。

同病院看護師の福田あずささん（30）は「抵抗力の弱い患者がコロナにかかれば重症化しやすく、移動の負荷も大きい。誤嚥（ごえん）や嘔吐（おうと）を防ぐために水もあまり取らせないので、熱中症も心配」と話す。

移転後の態勢や環境にも不安がある。重心の患者の多くは言葉を話せないため、微細な表情や様子の変化から望むことや体調をくみ取ってきた。だが、同院のスタッフ236人のうち、約70人が八雲町から離れられないことなどを理由にやむなく退職する。福田さんは「多くのベテランがごっそり抜けることにも、不安しかない」と話す。

八雲病院の病室はガラス張りで、スタッフルームから見渡せるようになっているが、移転先の病室は壁に囲まれた個室で音も聞こえづらいという。ナースコールを押せない患者も多いのに、体調に異変があったときに気づきにくくなることを心配する声もある。

6月下旬、患者を安全に送るためのリハーサルがあった。だが、業務中などで参加できないスタッフが多く、参加したのは2日間で延べわずか58人。休みだった職員の見学は自由参加だった。

移転先は医師充実、見舞いの負担減も

JR札幌駅から函館方面へ特急で2時間40分。八雲駅から徒歩20分ほどの場所にある八雲病院には新旧6病棟が立つ。患者は基本的にそれぞれの入院病棟の中で過ごす。

1944年に旧陸軍病院航空部隊病院として創設され、戦後の48年には結核患者が対象の国立病院として独立。64年以降、進行性筋萎縮症患者を受け入れてきた。82年に結核病棟は全廃となり、筋ジストロフィーと重心の病床が120床ずつの現体制となった。現在は石川幸辰院長ら2人の医師が常勤する。

患者の家族の要望などを受け、国立病院機構が札幌、函館への機能移転の基本構想を発表したのは2015年。患者の高齢化による合併症を治療できる医師や設備の不足という課題解決と、全道、全国の患者が集まる中、家族らの負担だったアクセスの不便さの解消などをねらった。翌年、移動の時期を「20年度をめど」と発表した。

18年には移転先病院の建物の増築計画などを示した基本計画を明らかにした。北海道医療センターに筋ジストロフィー116床と重心56床、函館病院に重心60床を新たに整備し、新築した建物に特別支援教育用の教室を設けることなども盛り込んだ。8月末での廃止と翌日の機能移転を発表したのは今年2月だった。



八雲病院の患者の一部を受け入れる北海道医療センター。敷地の西側に、受け入れ患者用の建物を新築した=2020年7月17日、札幌市西区



八雲病院の患者の一部を受け入れる国立病院機構函館病院。正面出入り口の裏側に建物を新築した=2020年6月25日、北海道函館市川原町

病院側「患者の安全確保。思いは同じ」

機構の阿萬哲也企画経営部長は朝日新聞の取材に対し、「患者の安全安心を確保した上で移送したいという思いは同じ。今の状況を踏まえながら、感染防止策をした上で移送できると考えている」と話す。

北海道医療センターの専門診療科は30を数え、医師76人が常勤。函館病院も26の専門診療科に医師30人が勤める。新型コロナに関しても、移転先のほうが治療態勢が整っているという。

阿萬部長は「設備が一新され、患者が合併症にかかったときに、他の医者との協力を得やすくなる。（コロナに）万が一感染した場合もすぐに対応できる。移送にあたっては専門医の意見も聞いたうえで、できる感染防止対策はすべてしている」と説明する。

機構は移転までもう一度リハーサルをして、マニュアル化できる範囲できめ細かい計画を立て、職員の不満を解消したいという。とはいえ、コロナ収束まで移転を待てない理由はあるのか。阿萬部長は「完全に安心できるようになるまで待つと、いつまでも移転ができなくなるのではないかと答えるのにとどまった。

八雲病院の跡地利用について、町は役場の新庁舎を建設する方針を固めている。

「とにかく無事に移送を」家族は願う

「八雲病院の患者家族には矢面に立って声を上げにくい実情がある」。全医労北海道地方協議会の鈴木仁志書記長は話す。

7月中旬、八雲町の男性が、筋ジスの次男の札幌への移送中止を求める仮処分を函館地裁に申し立てたが、4日後に申請を取り消した。



移送中止を求める仮処分申し立てについて、記者会見で説明する佐藤博文弁護士（右）と八雲病院の職員-北海道函館市

同病院は、入所して筋ジスの専門的な治療ができる道内唯一の病院だ。鈴木さんは「自宅でみることができないほど病状が重く、他の医療機関の選択肢がない患者には、病院との関係は悪化させられないだろう」と男性をおもんぼかる。

機構側の説明は十分だったか。4月以降、全医労は移転の延期を求めてきたが、機構側はその時点での道内の新型コロナ感染者数の少なさを理由に「延期の判断には至らない」と繰り返した。病院が患者と家族向けに移送計画の説明会を開いたのは、7月中旬になってからだった。



八雲病院に入院する高木好美さん（右）と、見舞いに訪れたひとみさん。同院では定期的に、患者の誕生日会を開いているという=ひとみさん提供

函館市の高木ひとみさん（62）の姉の好美さん（68）は重度の脳性まひで入院中で、8月に函館病院に移る予定だ。面会で声をかけると、満面の笑みで迎えてくれる姉がいとおいしい。栄養をとるためのチューブを鼻に挿入し、腕だけを動かせる姉。会社帰りに会いに行けるようになるから移転は楽しみだが、もし姉がコロナに感染したら、命の保障はないだろう。2月以降、「移転はコロナが落ち着いてからにしてほしい」と訴えてきた。